

さらばあの日のアイアイエー

キルケーの夫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——かつて終わらぬまま潰えた恋に、いま、決着をつけよう。

※ぐだ男×キルケーのSSです。

アイアイエーの春風のオデュキル描写に狂ったので投稿。

イベントシナリオが最後まで配信されるより前に書いたものです。イベントシナリオの結末で浄化されたら消すかも知れません。

さうばあの日のアイアイエー

目

次

1

さらばあの日のアイアイエー

「——ねえ、キルケー」

「ん？ なんだいマスター？」

「……いや、なんでもない」

呼びかけて、止める。彼女は不思議そうに首を傾げて、再び後ろを向いた。

鍋の火加減を調節しながら、彼女は手際良くなにかを混ぜてゆく。中では、彼女の得意料理であるキュケオーンが作られているのだろう。

カルデアの自室に、キッチンを新設したのはいつだつただろう。そこに立つのは決まって一人。

自分と比べて、ずいぶん小柄なシルエット。それを言えば怒りだから言わないけれど、忙しく動く小さな後ろ姿が可愛らしい。

キルケー。神話時代のギリシャに名高い、鷹の魔女。カルデアの召喚に応じてくれた、藤丸立香のサーヴァントで——多分、きっと、恋人。

ふう、と。ため息が漏れた。

一点の曇りない自信を持つて、彼女を恋人だ、と言えなくなつた。

彼女のことを愛していないとか、そんなことはありえないけれど——彼女が自分を本当に愛しているかは、ちょっと、自信が薄れていった。

我ながら女々しい限りで、けれど、どうにも。

『——キルケー？ ……このカルデアには、彼女もいるのか？』

思い返す、昨日の会話。

二週間前に召喚された、新しいサーヴァントは、そう言って首を傾げた。

カルデアに召喚されて二週間とは言え、一度もキルケーと顔を合わせないのはおかしな話だ。

よしんば会つていないとして、その存在すら知らないのはありえな

い。

彼女は曜日にもよるが食堂にも立つし、交友関係が極端に狭いわけでもない。

意図的に、避けている。避けさせている。

本人にそんなことをする意味はないのだから、つまり。

キルケーこそが、彼を——オデュッセウスを避けているのだろう。「(聞けないよな……。——『オデュッセウスのことを、どう思つてゐるの?』なんて」

キルケー。アイアイエー島の魔女。

彼女の最も有名な逸話は「オデュッセイア」に由来し——そこで彼女は、オデュッセウスに恋をした。

それは結局、破局に終わつたのだけれど、それはオデュッセウスが故郷を目指すために彼女の元を去る、という形でだ。

彼女は、オデュッセウスのことを未だに引きずつている。

その別れは、彼女に深い傷を与えたのだ。

藤丸はそれを知つている。本人からも聞いて、けれど——知らな
い。

振り切つた、と。

過去のことだ、と。

そう嘯く彼女が、本当のところ、彼にどんな感情を持つてゐるのか。それをずっと、聞けないままでいる。

もし、恐れている答えが返ってきたとき、どうすればいいか分から
ないから。

藤丸立香は、今日も彼女の後ろ姿を追つてゐる。

* * *

「いいんですか、叔母様」

キルケーは聞こえなかつたようにティーカップを手に取つた。

カップの中の紅茶は少し冷めていたが、香りは褪せていない。

遠くインドから来るそれは、自分たちが生きた時代にはなかつた物だけれど、なかなかどうして悪くないものだ。

「……叔母様!」

「なんだよメデイア、しつこいな」

聞かなかつたことにして話を流そうとしたものの、メデイアは食い下がつた。若い方の彼女はどうにも押しが強くて、苦手だ。

キルケーはため息をついて、眉をハの字に曲げる。

「叔母様、いつまで逃げ続けるつもりですか？」

「逃げる？ 誰からだよ」

「……何から、とはおっしゃらないんですね」

墓穴だつた。

キルケーは再び、深々とため息をついた。

「一度、会われた方が良いのではないですか？」

「……会う理由もないさ」

「あるでしよう」

「ない」

「なら、『会いたくない理由』があるんですか？」

「…………」

それに「NO」とは、言えなかつた。

「嘘偽りなくいうけれど、あいつには——オデュッセウスには、未練なんてないんだよ」

キルケーは、自らの体にナイフを突き立てるかのように、苦しげに

言った。

「もうずっと昔に終わつたことで——そもそも、あれは恋ですらな
かつた」

「恋にすら『しなかつた』んじやないんですか？」

「さあ、どつちでもいいじゃないか。終わつたことだ」

「終わつてないから、苦しんでいるんでしょう？」

これだ。

これだから、キルケーはメデイアが苦手なのだ。

無謀に、無作法に、無遠慮に。自分が「こうだ」と思つたことを疑わず、直進してくる。他人の事情なんてお構いなしだ。

「じゃあなんだ。いまさら蒸し返してやり直せつてのかい？ 冗談はよせよ。死ぬほど迷惑だ、その『要らぬ親切』は」

「いまさら恋をしなおせ、なんていうはずがないでしょう。ただ、決着をつけるべきだ、と言つてるんです」

「決着?」

「あなたは——失恋をするべきなんですよ
がしゃん！」

テーブルが揺れて、カツプとソーサーが跳ねた。

キルケーは拳をテーブルに叩きつけて立ち上がっていた。
それがどのような感情のもとになされたことか、自分でさえわからなかつた。

「もう、それが答えのようなものですよ。いつまでも置いておくから、いつまでも見ないままにしておくから、いつまでも先に進めない」
「…………」

キルケーは何も言えなかつた。なにかを言おうとして口を開いて、けれど濁流に飲まれる小鼠のように混乱した頭は、言葉を紡いでくれなかつた。

「マスターと、うまくいっていますか」

返答に窮する。

目眩がして、ぐつと歯をかみしめた。

「叔母様、選ばなければいけないんですね」

「私は……」

「自分にさえ嘘をついたままでは、ずっと一人ですよ」

目を閉じても、耳を塞いでも逃れられない。

それは誰より、自分自身がわかっていることだつた。

* * *

「よう、鋼鉄スースの伊達男」

カルデアの食堂。

多くのサーヴァントで賑わうそこの一角。

先客と向かい合うように、一人の男が席についた。

緑の髪と筋肉質な体。力強い印象を受けるその男こそ、トロイア戦争に名高いアカイア最大の英雄、アキレウスだ。

そして彼が声をかけた相手こそは——

「おお、アキレウス。お前も昼食か」

赤が混じる白い髪に、厳しい顔つき。見た目から受ける印象ほど堅物でもない彼は、トロイア戦争を終わらせた軍師にして、「冒險」という言葉の元となる大冒険を踏破した男——オデュッセウス。

「ああ、トレーニング後でな。ついでにちょっと、お前に聞きたいこともあつた」

「聞きたいこと?」

「まあ、お使いみたいなものでな」

後世の後付けデータラメ話じやあるが、夫婦だつたなんて言われることがあるんだ。頼みごとの一つや二つは聞くべきだろ。

なんてつぶやかれた言葉は、オデュッセウスには理解できなかつた。

「まあ、大体のことは答えるが、なんだ?」

「周りくどいのはめんどうだから直に入り聞くが……キルケーつて魔女のことを覚えてるか」

「ああ、アイアイエー島の? そりやな」

「あいつのこと、どう思つてる?」

「ん? ……そうだな。世話になつた、と思つているが」

「それだけか?」

アキレウスは拍子抜けしたように言う。

聞いた話からすると、ずいぶん淡白に思えた。

「……なんかもうちよつとこう、ないのかよ」

「そうだな。別れ際は、少しばかり心残りだ」

「心残り?」

オデュッセウスはうなづいた。

「出会いこそは最悪だつたが、それでも一年あの島で過ごした。色々とあつたが、ずいぶん世話になつて、それを忘れたことはない。そして彼女は、島を出ようと——故郷へ帰ろうとする俺を、最後まで案じて引き留めようとしていた。それは口論に変わり、最後には無理やりになつて、結局は振り切つて島を出たが——きっと、傷つけただろうな」

「……なるほどね」

アキレウスは大体を察した。

きっと、情がないわけではなかつたのだろう。

ただ彼の中には、譲れぬものがあつたのだ。

* * *

マスターへ。

少し出かけてきます。

* * *

「話があるんだ」

そう言つて、キルケーは男を呼び止めた。

その後ろ姿はあの時からなにも変わらない。

「わかつた、聞こう」

歯切れの良い返事だ。

その迷いのなさが、迷いだらけの自分を嘲笑うようにさえ思えて、憎たらしくなる。

「場所を変えよう。ついてきて欲しい」

ダヴィンチには、話を通してあつた。

彼女は人の思いを汲んでくれる。良いやつだ。少し察しが良すぎるとこころは嫌いだつたが、口をつぐんでいる良識はある。そういう気遣いができる部分は、今の姿になつても変わらない。むしろ今の方が上手いのかも知れない。

シミュレーターではあるけれど、そこはかつてのあの場所そのものだ。

彼女の記憶から作り上げたのだから、当たり前ではあるのだけど。

「ここは——アイアイエー島か」

覚えているらしい。

なんだかんだ、一年も一緒に過ごしたんだ。忘れてはいるはずもないか。

時刻は夕暮れ。血のように赤い空と、沈みかけた太陽。海はオレンジに輝き、寄せては返す波の音が穏やかに響いている。

「——初めて出会つた時から、きみのことを、鉄のような男だと思つて

いたよ

キルケーは後ろを向いたまま話し出した。

背後の彼が、どんな顔をしているかはわからない。

けれどそもそもなくては、話すことさえできなさそうだった。

「硬くて、重くて。叩いても曲がらず、熱しようとも歪まない。鉄の心を持つた男だと」

だから。

「手に入れたくなつた。それは簡単だと思つた。私は魔女だから、きみみたいな男であろうと、豚にならない男だろうと、手に収められると思つたんだ」

けれど。

「きみは変わらなかつた。きみを満たしてやろうといろんなことをした。故郷なんて忘れるべきだと言つてやつた。お前が帰つてももう居場所はないと言つてやつた。全部……間違いだつたわけだけどね」

自嘲するように笑つた。

彼を満たそうとする行為は、彼を満たすことはなく。

彼の故郷には彼を信じて待つ人がいて。

戻つた彼はあるべき形に、幸福に収まつた。

「私は——」

私は。
ずっと。

「きみが好きだつた

振り向いて、夕焼けが彼を照らしていた。

仏頂面。不機嫌そうに見えるけれど、怒つてるわけじやなく、それが普通だ。そんな表情の機微さえ分かるほどに、かつて彼を知ろうとしたのだ。

焦がれて、求めて、手に入らないと分かつて。
掴む袖さえ振り払つて、この島を抜け出した彼が。
どこまでも憎くて、好きだつた。

「そうか」

彼は、少し目を閉じて、答えた。

「その思いには、答えられない」

開かれた目が、キルケーを見ていた。

揺るぎない瞳に、かつても今も、変わりはない。

「妻がいるんだ」

「愛しているのかい」

「ああ、愛している」

「私のことは？」

「愛せない」

キツパリと。呆れるほどストレートな拒絶。

でも、思っていたよりもずいぶんと、それが清々しかつた。

「ひどいやつだ、きみは。少しくらい優しく『言えよ』

「本音には、本音で返すべきだろう」

「はは、全く、きみつてやつは。なんて残酷な男なんだ」

涙は出なかつた。

もつとずつと、傷つくと思っていたのに、不思議と納得があつた。

「もつと、辛いと思つていた」

失恋は。

何千年も引き摺つたそれが、白日の元に晒されるのは。

「なんというか、すつきりしたよ」

そう、すつきりした。

長い間積み重なり続けていた感情の負債が、消えてなくなつた。

「不思議だね」

そう言つて笑うキルケーをこそ、彼は不思議そうに見つめた。

「驚いた、気付いていないのか？」

「なにをだい？」

「それは——いや、無粹か」

キルケーの頭に疑問符が浮かぶも、オーテュッセウスはただ笑うだけだ。

「俺は戻る」

「なんだよ。置いていくのか？」

「すぐに迎えが来るさ」

言うや否や、オデュッセウスは消えた。シミュレーターから離脱したのだ。

なんとも無愛想な男だ。キルケーは呆れて、海岸を歩いた。

「はー、全く……。迎えって言つても、誰が——」

なんて、一人のつもりで振り返つて——停止。

「キルケー……」

「ま、マスター?」

泣きそうな顔をした、己のマスターがそこにいた。

「どうしたんだよ、そんな顔で」

「その……置き手紙があつたから」

確かに、部屋に書き置きをした。

少し出かけてきます、とだけの、簡素極まるそれで、シミュレーター

にいることさえわからないはずなのに。

「どうして……」

「キルケーが」

一步、近づいた。

「キルケーが、いなくなつてしまふかもしねりないと思つた」

あんぐりと、キルケーは口を開けた。

怯えと、嫉妬と、愛情と、恋情と。入り混じつた表情は、なんとも
いじらしく。

見ているうちに、じわりと胸の奥があたたかくなつて——

「あははははっ!」

大声で笑つた。

「き、キルケー!?」

「きみは、きみは私が消えてしまふと思ったのかい? オデュッセウスに付いて行つて? それが不安で迎えにきてくれたのかい?」

「いや、だつて……!」

「うふふ。そうかそうか! いやいや、ごめんよ。不安にさせてしまつたね。悪かつた。あはっ、あははははっ!」

そつと、頬を零が伝つた。夕陽を受けて、輝く零が。

失恋したつて流さなかつたそれが、どうしていまさらあふれだした

か。

「そうか、そうだつたんだ」

ずっと引きずり続けて、ずっと心の奥にしまっていたから、わからなかつたけれど。

心の奥にモヤモヤとあり続けていたそれは、未練なんかではなかつた。

古い記憶が、新しい恋を邪魔する痛みだつたのだ。

「ねえ、マスター」

キルケーは、マスターにそつと抱きついた。

「私、失恋したんだ」

胸に顔を埋めて。その暖かさを、その恋しさを確かめた。

「ひどい男に、お前なんか嫌いだと言われて、私は大層傷ついた。だから――」

胸の内から見つめる恋人^{マスター}の顔は、ずいぶんと混乱していた。それが面白くつて、愛おしかった。

「慰めてくれるかい?」

* * *

「昔ね、私ははずつと一人だつたんだ」

遠くに細波の音が聞こえる。

寝転んで、共に星空を見上げていた。

「寂しくて、苦しくて、そこへ、一人の男が現れた」

鉄のような男が。

「私は彼が羨ましかつた。彼は強かつた。筋力が、とかじやないよ?心が、あり方が。私はこんなにも弱くて、いまにも折れそつたって言うのに。あの男はずつと、搖るぎもしなかつた」

多分、それは。

「憧れだつたんだ……きっと。寂しくてたまらなかつた私は、一人でいるのに、かけらも寂しそうじやないあいつに憧れたんだ」

そうなりたくて、求めて、拒絶された。

「当たり前だよね。あいつが何か特別で、強くいられたわけじゃない。あいつはただ、一人じやなかつただけなんだ」

どんなに離れていても。
どんなに遠くにいても。

「前提から間違えていたのさ、私は」

あいつを手に入れれば、寂しくなくなると思った。でも、それは間違いに間違いを重ねた破綻した回答だ。

「私に必要だったのは——」

隣を見る。

黒い髪。青い瞳。

目が合って、自然と笑みが溢れる。

そつと起き上がり、彼の上に覆いかぶさる。

「きっと、言葉なんていらないと、そう言うべきなんだろうね。でも、私は強欲だから——きみの口から聞かせて欲しい」
溶け合うほどに近く、星の煌めきが瞳に写る。

愛する人は、そつと口を開いた。

「愛してる」

それが、たまらなく嬉しくて。

そつと、口づけを。

「ああ、私も——愛してるよ、マスター」